

哲学カフェ de ぎふ

せんしゅう

千秋まちかど文庫 通信



運営委員会発行(記録:安藤彰浩、編集:中川健史)(主宰:吉田千秋 090-7917-9602 yoshida0@sepia.ocn.ne.jp)

第168回哲学カフェ例会(2022.6.9)記録

《「18歳成人」問題を考える》

「成人になったからといって、一人前の大人になるわけではない。子どもじみた大人、無責任な大人ではなく、皆と協力し、助け合って生きていける大人になってほしいと思いました。」

問題提起 吉田 千秋

- 法律上の成人と認められる年齢が今年の4月より18歳に引き下げられました。日本で成人が20歳と定められたのは、今から約140年前、明治9年のことでした。だが今では、世界のほとんどの国は18歳で、日本はようやく世界の流れに沿っただけと言えます。成人は親の同意なしで、携帯電話の契約、クレジットカードを作ったりすることなど、沢山あります。世論調査などによれば、該当する若者の多くは、戸惑いがあるものの、個人的に楽しみなこともあってそれなりの期待も持っている様です。
- しかし他方で、若者は概して社会経験に乏しく人間関係にも不慣れで他人を信じやすい傾向があり、トラブルに巻き込まれる懸念もあります。消費者庁や国民生活センターは、仕事や契約関連の詐欺に巻き込まれる危険に注意する様に勧告しています。結婚に関して言えば、女性は以前16歳で結婚可能でしたが、今回、家庭は男女が共同で築くという考えに従って、年齢が引き上げられ男性と同じ様に18歳で初めて結婚可能と変更されました。
- だが、法律上「成人」年令が下げられたとしても、「成人」=「大人」ではありません。肝心なことは、そもそも「大人とは」、あるいは「大人になるとはどういうことなのか」ということです。しばしば「もっと大人になれよ」と言われ場合は、たいてい「皆に合わせて生きる」という意味です。これは「大人」の一面を指したものにすぎなく、「大人」とは、もっと自分なりの考えを持って生きている人間のことでないでしょうか。それが、多くの親たちが子どもに望んでいる「一人前になってほしい」ということではないでしょうか。

- もちろん経済的にも、精神的も他人に従属しないで自立して生きられることは重要です。でも、他人の支援が欠



- かせないであろう病気の人、障害を持った人たちや、貧困格差の激しい今の世の中では自立の困難は増しています。互いに助け合うことが必須ですし、そうした支えあう条件作りがとても重要でしょう。だから、「大人になる」というのは、みんなで支え合う中で自分もしっかり生きていける人間になる、ということではないだろうか。
- 日本でも多くの方が、若者に社会の主人公として活躍してくれることを望んでいます。そのために若い人たちが自信を持って社会に関わって行くことができる環境を作って行く必要があります。教育基本法の根底にある教育の基本理念は、まず個人として自らの幸せを実現する力を持った人間を育て、同時にまた、主権者として国家や社会を担ってくれる人間に必要な能力を身につける手助けをすることです。教育の理念に照らして、私たち大人自身が自立した一人前の大人になっているのかどうか、よく考えなければなりません。これで十分ということはないのかもしれませんが、大人のあるべき姿を考えることが必要で、それが本当の大人になる新たな出発点となるでしょう。「18才成人」制定を機に、今日はいろんな角度から意見を交換しましょう。

<意見交流>



- * (新成人)今年3月に18歳になった。法的に成人となった訳だが、生活の何かが変わったということはない。成人になるということは公式に社会参加の資格を得ることだと思う。社会で力を発揮したいという気持ちはあるが、何をしたらよいのか分からない。成人と言われても、社会と向き合う姿勢を急に変えることはできない。そもそも向き合い方が分からない。自覚が無いまま、法律上だけ大人になったといった感じである。
- * (新成人)成人になってソーシャルメディアを使用する制限が無くなった。インターネットを自由に使えて、SNSの情報収集も制約されずに見たいものを見ることができる。これまで学校で決められたことをする生活をしてきたので、嬉しさと戸惑いが相半ばする。
- * 大学生と高校生の母親だが、子どもたちと話ができておらず、成人ということについて何を考えているのか分からない。本人たちは自信を持っているらしいが、子どもたちが家の外でトラブルに巻き込まれずちゃんとやっていけるか親として心配である。
- * 数年前、選挙権を得る年齢が18歳に引き下げられ、今回と同じ様に大人とは何か議論された。その際も、急遽、学校で政治を教えることになったが、準備不足の感を否めなかった。学校で教えられないこともある。大人になることで様々な権利を得る。しかし権利はそれを行行使う際の責任を伴う。責任を負うことができない者が増えることが不安である。
- * 大人に不可欠の要件は、他人の前で自分の立場をしっかりと説明することができる能力を持つということであるだろう。ヨーロッパで長く生活した経験から感じたことだが、向こうでは個人が自己を主張することをネガティブに捉えない。それどころか自分の立場を説明する能力は一人一人が社会で生きて行くために必要不可欠と見なされる。だから子どもでも驚くほどはっきり自分のことが言える。日本では反対に自己を主張することはしばしば我まま者の誹りを受ける。多様性とか個人の立場よりも組織、集団の立場が重んじられる日本社会における典型的な反応である。自己主張することの本質は、自分が何を望み、何を望まないか、何が好きで、何が嫌いかをはっきりと述べることにある。この能力の養うことを阻害することは人を未成熟なままに留めることに他ならない。
- * 投票率が低い。自民党は現実には国民全体の2割ぐらいの支持しか得ていない。自民党支持者の多い高齢者が自民党政権の担い手となっている。だから若者が選挙に行って社会をよくしてくれることを期待している。
- * 若者は日本人であることを意識しない。彼らの多くは意識調査によれば概ね今の政治や世界に満足している。20代の自民党支持はむしろ高い。新たに選挙権を得た若者は、判断を間違えてはいけないという意識が働いてプレッシャーを感じている。失敗が怖い。世界や日本をどうしたいのか、社会のどこがどうなのか分からない。だから安全策で政権党を支持する。

* 大人として何をするかではなく、人間として何をするかを考えるべきである。大人と未成年者の間にはっきりとした境界線はない。経済的自立も大人である為にはそれ程重要な要素ではない。依存のあり方も多様である。親の経済的な状況など、運に左右されることも多い。

* 社会状況は大きく変化していて、大人になったら、社会的、経済的に自立するということが容易でなくなっている。長年引きこもりの支援活動をしてきたが、最近、40代、50代の引きこもりが珍しくなくなっている。様々な事情で男子の4人に1人は未婚である。一人前の人間とは、学校を出て、就職し、結婚して家庭を持ち、家を建てるという人生の基本モデルは有効でなくなっている。

* 個人の視点だけで自立、独立を考えることには限界がある。一人の人間の一人立ちは初めから社会的に条件付けられている。豊かな人生を送れるかどうかが重要である。お金だけでなく、文化的環境、人間関係の豊かさ等が重要である。

* 昔(近代化以前)、成人の仲間入りを祝う元服の儀式は15歳位で行われた。各個人が適切な能力を持っているかどうかを一律に年齢で定めることはできない。自立した生活の能力を持っているかどうか個人によって異なる。権力の側の都合で決められるより、各人に判断させた方がよい。

* 同世代の半数以上が大学に入る時代である。社会に出る代わりに学校(大学更に大学院)へ入るから、当然、他人に依存して生活する期間が昔より長くなっている。成人に与えられる権利を何時から行使するか、それぞれが考えて判断する様にすればよい。

* 3月生まれで18歳になっていて、今年4月から公式に成人となった。心の準備期間はなかった。成人なので住居探しを親を介さず自分で出来るので、親と話し合って承認を得る煩わしい思いをしなくて済む。

* 昔、二十歳になって選挙権が得られた時、投票に行けることが本当に嬉しかった。酒やタバコも他人に気兼ねせず愉しむことができる。最近、全国の中学



高校で、生徒たちの要望に従って、合理性を欠いていると思われる校則を廃止する動きが出ている。こうした行動の出来る若者たちには期待が持てる。

* 先に選挙権を得る年齢が18歳に引き下げられた。20代は与党の自民党に投票する者が多数を占める。この傾向から判断すれば、20未満の成人も与党に入れる者が多数になるだろう。資格年齢の引き下げの改革はしっかりした政治教育を受けていない若者は御しやすいという政権側の判断があったのではないか。もっとも大人だって、背広を着ているだけで中味は未成年者と大差はない。

* フィリピンの若者は意識が高く各々がそれなりの意見を持っている。日本の若者は精神的に完全に学校に依存していて、社会の問題について関心を持たない。日本の若者の生活は実生活から遊離している。そのために全般に社会問題について無関心である。フィリピンは政治文化においてアメリカ化が進んでいて、ディベートが社会で定着している。日本人は政治的な意見交換の体験を持っていない。

* 一人前の人間として生きて行くために必要不可欠なことは、他人の意見を聞く力を持つことだと思う。自分の意見を述べるだけでは十分ではない。人間関係においても、社会においても合意を作ることが重要である。他人の意見を聞いてその立場を理解する能力が問われる。

* 私は意味のあるものに思えず、成人式に出なかった。ただ年齢基準を満たしたから大人になるというものではない。一人の人間として自分の意見を持つことは重要であるが、他人の意見にしっかり耳を貸し、同時に他人に惑わされないようにすることは簡単なことではない。

*自分で考えることから始まる。失敗や過ちも度々犯す。経験に学ぶしかない。その都度の積み重ねで人間は成長する。それぞれがそれぞれの人生を生き、異なる経験をする。意見が異なっても構わない。異なる意見からより多くのものが見えて来る。60を過ぎても最終的な答えは見つからない。

*自分は定時制の華陽高校に通っていた。16から18才の若者は皆学校では至って真面目だったが、学

校の外では悪戯者がいた。自分も夜、道路で爆竹を鳴らして、通行人を驚かせて喜んでた。確かに未成熟で正に子どもじみている。何が大人なのか答えるのは難しいが、何が大人気ないかは分かる。

*多くの人は、明日もまた今日と同じだから、わざわざ選挙に行かなくても好いと考えている。本当は、明日はもうないかもしれないと考えるべきなのかもしれない。

<意見交流の最後に> 吉田千秋

・多くの人の意見を聞くことが出来ました。自分の意見を持つことの大切さが改めて明らかになりました。異なる経験をした者が異なる意見を持つことに何の不思議もありません。ただ借り物の意見でなく、経験に照らして物事を自分で考えることが必要です。そのためには、他人の意見をしっかり聞いて、共通点や違いを明確につかむことが大切です。勝ち負けは問題ではありません。自分の意見をより発展させることが肝心なことです。

・さらに留意しておきたいのは、現実世界の問題では、正解、不正解の区別が曖昧で、問いがあっても正解と言える答えがないことも珍しくありません。善とは何か、平和とは何かに、正解で答えることは容易ではありません。ただ武力が行使されなければ、それで満足できる平和が実現したと言えるのでしょうか。他国と戦争していないだけで、社会に見過ごせない貧困や差別がある状態の国を平和と呼ぶことには戸惑いを感じます。

・日本の教育では常に正しい答えのあることが前提になりがちです。より良い答えを見付けるために迷っても構わないのです。問いを発し、解を求め続けることが重要です。より良い生活を、より良い生き

方を求め続けましょう。問い続け、答えを求め続けることに子ども、大人は関係ありません。政治家、専門家と



いった特定に人間に任せればよいということではありません。国民一人ひとりが自分で考え、意見表明できるような社会・政治環境を整えることが、いま日本の大きな課題と言えると思われます。ウクライナの戦争に目を奪われがちですが、ミャンマーの問題があることを忘れないようにしたいものです。民主主義を大事にすることに国境はありません。ウクライナ問題とともに、ミャンマー問題でも、日本政府には平和憲法の精神に立った毅然とした対応を求めたいと思います。そして、私たち一人ひとりがミャンマーの人たちの苦難をしっかり受け止め、自分なりの支援の手をさしのべたいと思います。

<例会感想、意見、便りなど>

○<前号167号を読んで>

ミャンマーについての中澤先生のお話は、具体的に、とてもよく分かりました。

ウクライナ問題の方は、国境を越えての”領土拡大”(?) 侵攻。”内政問題”とは明らかに異なります。それこそ、世界の全ての国が「侵攻反対」の声を上

げるべき問題ですよね。フィンランドやスウェーデンの気持ちは分かりますが、でも、NATOに入ればよいという解決ではなく、軍事的中立の立場での仲介の役目を果たして欲しかった…とも思いました。

ミャンマーと同じような問題として、新疆ウイグルの問題も考えなければと、私は思っています。(あ)

写真提供 質浦秀樹さん(岐阜大学名誉教授)
昆虫、鳥の写真は、友人の質浦秀樹さん(岐阜大学名誉教授)に提供していただきました。野鳥などの写真展もされた人で、このたび15枚送信してくれました。できたら順次掲載したいと思っています。

〇<18才成人、よくわかりません>

18歳成人問題については、20代の若者があまりにも幼く見えて、ピンときていません。これは私が歳を重ねたせいかもしれませんが。



カルガモの親子

女性の結婚年齢が18歳と男性と同じになったことはなるほどと思います。また、結婚できるということは自立して生きていくための契約ができないと困るということでもあるので納得できます。

若者への注意喚起は保護されていて経験が少ないから特に大切だと思います。

それにしても、なぜ18歳成人になったのでしょうか。世代間の選挙権の数でしょうか。よくわかりません。(U・Takako)

〇<成人とは社会人になること>

成人とは社会人になることである。社会人とは自分の行動に責任が持てるようになることである。しかし、ある年齢から突然その機能が付加されるわけではない。個々の努力に加えて、社会全体が周囲の目を通じて育てていく必要があり、社会もその責任が課せられているのだと思う。

責任ある行動とは、とった行動に対して結果責任を持つことであり、衝動的に行動するのではなく、論理的な説明が出来る行動ではないだろうか。そのためには、人それぞれが自分なりの価値判断=行動基準を持つことが肝要であり、自分の物差しを身につけることと言える。そして、その物差しは必ずしも固定的である



キジのオス

必要はなく、年齢・経験により常に見直されてブラッシュアップしていくものである。つまり、成人するとは自分自身を客観的に判断できる視野を備えることと言えるのではないだろうか。(ryosa)

〇<若者の声を聞けるのは楽しい>

今回はZoomの活用により、東京と京都など、遠隔地からの参加者があり、声を聴くことができよかったと思う。今月中に81歳となる私にとっては、18歳には限らず、自称「若者」の声を聴くことは楽しいものです。自分が成人式を迎えた頃を思い出すと恥ずかしいのであるが、嬉しさも中くらいで、人生をどう生きるかというよりは、大学を出たら本当に就職できるのか、当時の貧困生活からいかに脱却できるのかだけが、大きな課題だったように思う。現在の危うい社会的・政治的状況を鑑みると、若者に期待したいことは沢山あるが、その前に、我々老人が、次世代に何を残せるのか、真剣に考えねばならないと思う。(MS)

〇<大人になるとは他者を思いやれること>

18歳が成人年齢になるというのは、ただの法律上の線引きでそれ自体にはあまり意味のないことだと思います。重要なのは大人になるとはどういうことかということで、自分は大人というのは多少は関係する他者を思いやることのできる成熟した人間と考えています。

そうすると日々散見するのは、安倍や橋下や亡くなった石原など子供の悪い面を純粋培養して成長し



ゲンヤンマの産卵

たような大人ばかりか、それらを支持するいい年齢の国民です。大体日本人の60歳以上の大人は自分の既得権益を維持するために、2000年前後に派遣労働の自由化を認めてロスジェネから下の世代の経済状態をおおきく毀損させた罪があると思います。これから成人年齢になる若い人達にはこんな大人[自分のことです]になっちゃいけないよと思ってしまいました。(たなか)

〇成人問題と徴兵制問題の関わりにも注意したい

「18歳成人問題」を論じ合った6月例会では、若者の発言や多面的な切り口からの意見もあって、有意義だったが、ふとある観点からの検討は無かったの

では、と思い当たった。

それは「個人と国家との関係性」についての考察だ。その象徴的問題が徴兵制で、戦時下のロシアとウクライナでは、18歳の若者に重い決断が迫られている。

ウクライナでは2013年に一度廃止され、ロシアでも志願制(契約兵)枠を増やし徴兵は減らす方向にあった。だが、2014年に内戦が始まったウクライナでは復活し、ロシアでも春と秋15万人ずつ召集され1年の兵役に就く。両国とも徴兵された新兵が前線の任務に就くことはないと言われるが、「殺し合いの場」に間違いなくうんと近づく。

昨今の急激な情勢変化の中、スエーデンでも徴兵制は復活との話だ。日本も無縁ではない。「18歳成人」とは、国によっては若者に深刻な問題を起こしていることを日本でも想起したい。

(フィリピン・ウォッチャー)

〇＜要求運動なしで成立した18才成人＞

私が18歳手前で、「18歳成人」を強い願望として

持っていた記憶がない。当時の成人年齢である20歳を待ち望んでいたかと言うと、そうでもなかった。そして、20歳代になり、「18歳成人」の主張は持ち続けて今日に至った。

2～3年前から「18歳成人」の動きが出てきて、法案化し法律として決まってしまった。それが青年層の成長の自覚からくる要求運動として盛り上がってきたのでもなく、世論の流れとしてでもなかった。そのせいか、成人になる大人たちと親たちに対する内容の衆知・教育の立場が弱く、他の法律との整合も進んでおらず、契約や養育費などでトラブルが予想される。トラブル防止のために公的機関による衆知が望まれる。

稀に見る未成年者の凶悪犯罪の取り締まりの観点から、18歳成人が出てきたとも言われている。だが、凶悪でない犯罪については、従来通り20歳まで氏名を秘し、教育、訓練で再発防止の取り組みを進めることが望ましい、と私は思っている。(アダム・スミス)

<この一本> 斎加尚代監督 『教育と愛国』 2022年製作/107分

現在、岐阜市立図書館で「教科書の展示」(略称教科書発行法により毎年展示することが定められている)が開催中であるが低調である。教科書採択に関する市民の意見を述べる機会もあるが参加者は少ない。

この教科書検定問題を考える上で、最適な映画が話題になっている。大阪毎日放送制作の教科書検定問題のドキュメンタリー番組を基に、追加取材を重ねて完成させた映画である。

番組を作るきっかけは2017年小学校の道徳教科書の検定だった。パン屋を題材にした教科書が、国や郷土への愛が足りないと指摘され、舞台を和菓子屋に変えた(洋楽器屋が和楽器屋にも)。「もともと笑えるような出来事に検定制度の問題が凝縮していた」と斎加尚代監督は語る。

1997年1月「新しい歴史教科書をつくる会」が誕生。会の目標は「新しい歴史教科書を提供することであり、既存の教科書は『自虐史観に基づいた反日』と厳しく非難した。歴史教科書の慰安婦の記述を巡り右派勢力から攻撃され倒産に追い込まれた老舗の教科

書会社日本書籍の元編集者は、教科書づくりで広がる政治への忖度を明かしている。

教育現場の政治圧力が増していく様子は、ぞっとするほどにおぞましく、内心や言論、学問の自由といった民主主義の基盤が壊されていく危険状況である。

さらに、2020年に勃発した日本学術会議の新会員任命拒否問題で、科学者の代表機関の人事に政府は手をつっこんできたことが、斎加監督の映画化を強く押した。

なお、斎加尚代・毎日放送映像取材部著『教育と愛国(誰が教室を窒息させるのか)』(岩波書店刊)は、映画の元になった記録で、大変詳しい。現在、当映画を岐阜市で上映するように働きかけている。

(井口 篤朗)



<この二冊> 安田菜津紀著『あなたのルーツを教えてください』 左右社、2022年2月刊
安田菜津紀、安田浩一著『外国人差別の現場』 朝日新聞出版(2022年6月刊)

東日本大震災ばかりでなく、世界各地の紛争地、難民キャンプを訪ね、数々のルポを提供されてきた安田菜津紀さん。今年に入り、在日外国人の差別や苦悩に焦点を合わせた二つの本を出されました。



日本には様々なルーツをもった人々が暮らしている。中には、「日本人」として育ってきたのに、片親が日本人ではないことを後年知らされた人も少なからずいる。そのことを知っているも、偏見・差別を恐れて隠し続けねばならない人も大勢いる。実は、安田さんもその一人で、父親が韓国籍であることを高校生の時に手にした戸籍で知ったのです。

その安田さんが精魂込めて編まれた一つは、『あなたのルーツを教えてください』です。これはベトナム戦争後に木造船に乗ってやってきた人や、ロヒンギャ難民だった人、ドイツ人と日本人、フィリピンと日本人の「ハーフ」としての苦難の日々を歩んできた人たち、そ

して多くの在日コリアン人たちなどへのインタビュー集です。その一つ一つに、苦難の中で必死に生きてこられた歩みに胸を打たれ、勇気を与えられます。

先輩ジャーナリスト安田浩一さんと共著『外国人差別の現場』で、菜津紀さんが焦点をあてているのは、昨年名古屋入国管理局内で「死んだ」スリランカのウイシュマさん問題です。この問題は、「技能実習制度」による奴隷的労働とともに、日本の外国人に対する偏見・差別の典型的な事件で、彼女はこれを入管組織の構造的な問題として暴き出している。

日本社会における人権無視、無責任な政治を問い直すために、ぜひ手にとって頂きたい二書です。なお、安田菜津紀さんは、今年の「ぎふ平和のつどい」の記念講演者であり、大変楽しみにしています。(Sensyu)



哲学カフェdeぎふ 14周年記念講演 & 討論会

テーマ 危機の時代に平和を探る

* 泥沼化するウクライナ戦争、それに乗ずる日本での軍拡・核共有の声高な主張。この方向で危機を乗り越え、平和は得られるのか？ 科学技術の戦争利用に警告を発し、武力なき平和を訴え続けてこられた池内先生の話聞いて、みんなで考えましょう。

<日時> 8月11日(木・祭) 午後1:30~4:00

<会場> 長良川スポーツプラザ大会議室

〒502-0817 岐阜市長良福光2070-7

<資料代> 500円(若者は無料)

いけうち さとる

<講演> 池内 了さん

「ウクライナ侵攻から平和を考えるー歴史の順行と逆行ー」

1944年兵庫県生まれ。京都大学理学部卒、同大学院博士課程修了。名古屋大学名誉教授。宇宙論・科学技術社会論。「世界平和アピール七人委員会」委員、「九条の会」世話人、「中日新聞コラム<時のおもひ>」執筆者で、平和のための活動を精力的に行っている。著書に、『疑似科学入門』(岩波新書)、『宇宙論と神』(集英社新書)、『科学者と戦争』(岩波書店)、『兵器と大学——なぜ軍事研究をしてはならないか』(岩波ブックレット)、ほか多数。



当日は、ZOOMを使い、オンラインでの参加も計画しています。右のQRコード、ポポロアドレスまたはポポロのアドレスinfo-popolo@qc.commufa.jpに「哲学カフェ講演希望」と書いて送信してください。



開催日前日までに、必要なURLやIDとパスコードを申し込みのアドレスに返信します。それを使って入場してください。

NPO法人仕事工房ポポロ

<コーディネーター>

吉田千秋

「哲学カフェdeぎふ」主宰者。1943年大阪市生まれ。京都大学文学部哲学科卒、名古屋大学大学院博士課程修了。元岐阜大学地域科学部教授(哲学)。名古屋哲学セミナー常任講師。「岐阜・九条の会」代表世話人、岐阜平和美術展会長。

哲学カフェ 第27期(2022年前半)例会予定 *毎月第2木曜日、午後7:00～9:00 ふれあいスペース
⇒ コロナ警報で中止の場合あり、テーマも変更あります。連絡下さい。

第166回例会 4月14日(木)	「天皇制・皇室のいま、これからどうするの？」 * 昨年メディアがむやみに取り上げた真子さん結婚問題。放っておいたら良いのに。 * 肝心の女性天皇や女性宮家の問題については、またもや放置。どうするのかね。	終了 しました
第167回例会 5月12日(木)	「いまミャンマーはどうなっているか、あらためて考える」 * ウクライナ侵略とともに、忘れてはいけないミャンマー軍政の弾圧。国民の抵抗も続け * 今回、ミャンマーへの大学教育支援、留学生の受け入れなどを長年行ってこられた仲澤 卓大・物理学)に話していただき、意見交換します。	終了 しました
第168回例会 6月9日(木)	「18才成人」問題を考える * 今年4月から、成人年齢が18才からとなる。世界から取り残されていたがやっと18才に * だが、選挙権と同じく問題がいろいろある。それにしても、そもそも大人ってなんだろう。	終了 しました
第169回例会 7月14日(木)	「参議院選挙を終えて・明日はどうなる？」 * 岸田内閣になって何の成果もないのに支持率上がり、軍拡路線を邁進。 * 野党は共闘が十分に組めないまま選挙へ。結果を見て明日を考えよう。	
第170回例会 8月11日 (木・祭)	「開設14周年記念」講演・討論会 * 3年ぶりに記念行事を開催。8月11日(木・山の日)、午後。長良川スポーツプラザ大会議室。 * 講演は池内了先生(名古屋大学名余教授・宇宙物理学)←4年前に続いて。 * テーマは「ウクライナ侵攻から平和を考えるー歴史の順行と逆行ー」	

哲学カフェの運営資金の協力も、よろしくお願ひします。

口座記号・口座番号 00810 1 142912

加入者名 哲学カフェ de ぎふ、千秋まちかど文庫

「哲学カフェ de ぎふ」ホームページ 毎回更新中!!

<http://tetsugakucafegifu.jimdo.com/>

右のQRコードをスマホなどで読み取ると、「哲学カフェ de ぎふ」のホームページが開きます。ぜひ閲覧願ひます。友人・知人に拡散いただければ幸いです。



わいわいがやがや

ア
ラ
カ
ル
ト

★「たのしみは朝おきいでて、昨日まで無かりし花の咲ける見る時」。この「型破りの自由」短歌は、福井県民ならほとんどの人が知っている江戸末期に生きた橘曙覧(たちばなあけみ)の「独楽吟(ひとり楽しむ吟)52首の一つである。

★実は、正岡子規が、万葉期以来の歌人として讃えた橘曙覧については、なにも知らなかった私ですが、15年ほど前に福井市に住む機会があり、その時はじめてこの「有名」歌人とこの歌を知った次第。

★この歌が特に知られるようになったのは、元アメリカ大統領ビル・クリントンが、1994年に、米国へ訪問した平成天皇

皇后両陛下の歓迎会スピーチの中で引用したことが、きっかけである。

★それまでほとんどの日本国民は橘曙覧のことなど、知らなかったのではないかと思うが、一躍脚光を浴びることになったわけで、クリントン氏(側近の官僚のアイデアか?)の政治的文化的な外交力と言おうか、その演出力に感心する。比べて日本の政治家は?

★この歌を現代語に訳すと「私の楽しみは、朝起きた時に昨日までは、見ることがなかった花が咲いているのを見る時である」。「独楽吟」のスタイルは、「楽しみは」に始まり、「～する時である」と結べば、中身は全く自由である。清貧に甘んじて、日常のささやかなことどもを、ユーモアを交えて楽しむ橘曙覧に学ぶことは沢山ある。

(島田 幹夫)